

訳者後記

本書は、一九八六年五月に出版されて以来、おかげさまで、順調に版を重ねてまいりました。しばらく前から品切れ状態になっておりましたが、このたび、新装版を出すことになりました。そこで、あらためて訳文を読み返してみると、既に二〇年近く経っているためもあって、少々気になるところがあちこちに見つかりました。そのため、細かい直しを入れるとともに、少々時代遅れになった訳者後記も、全面的に改稿することにしました。そこで、この機会を借りて、日本の科学者たちが、臨死体験という遍く知られた現象をどのように受け止めたかを振り返ってみたいと思います。

臨死体験という現象と日本

わが国の読者に臨死体験が初めて紹介されたのは、レイモンド・ムーディの最初の著書『かいまみた死後の世界』が、一九七七年に評論社から翻訳出版された時でした（正確には、『リーダーズ・ダイジェスト』誌日本版にその原著の要約が掲載されたのが最初です）。当時、ハワイ大学に在籍

していた（現在は、京都大学大学院人間・環境学研究科教授）カール・ベッカー（別華薫）氏が、本書「日本版序文」で書いているように、日本人には、この種の体験に昔からなじみがありました。しかし、通俗的な逸話としてではなく、現実のものとしてこの体験が取りあげられたのは、『かいまみた死後の世界』が最初だったのです。超心理学という分野では、もつと前から同種の体験が研究されてきていたのですが、ごく一部の専門家を除けば、それらの研究は全く知られていませんでした。ムーディの原著は一九七五年に出版されていますから、今年でちょうど三〇年経ったところです。

臨死体験の研究報告が最初に医学雑誌に載ったのは、本書の著者マイクル・セイボムによるものが最初でした。それは、本書の冒頭に登場するサラ・クルージガーとの共著論文で、一九七七年九月に『フロリダ医師会誌』に掲載されたものです。それ以降、現在に至るまで、一二〇件を越える論文が、医学や心理学の雑誌に掲載されています。救急医療や精神医学関係の専門誌にもたくさん載っていますが、最も多いのは、『ランセット *Lancet*』というイギリスの一流医学雑誌です。また、この雑誌には、本書で追究されているような、二元論的な立場で書かれた論文も掲載されています（一般の科学者は、心は脳の活動の結果として作られると考えていますが、心は脳から独立していると考える二元論的な立場の論文ということであれば、『アメリカ医師会誌』^{〔註1〕}や『アメリカ精神医学雑誌』をはじめとする、いくつかの一流医学雑誌にも載っています）。これは、わが国の医学者や科学者にはほとんど知られていない事実でしょう。

アメリカでは、後に国際臨死研究学会の母胎となる学術団体が、一九七七年一月に、ムーディ

やセイボムらによって創設されました。既にこの時点で、医療関係者を中心とする専門家たちが、臨死体験の組織的研究に取り組み始めたわけです。そして、一九八一年には、臨死体験の専門雑誌 (*Anabiosis* = 現在の *Journal of Near-Death Studies*) が、国際臨死研究学会から創刊されています。編集委員には、ムーディやベックカー氏らとともに、セイボムもその名を連ねています^[註2]。その後、この方面の研究は、大きく発展を遂げて現在に至っているわけですが、その間、わが国の、特に医療関係の専門家たちはどうしていたのでしょうか。

本訳書が出版されるまでも、臨死体験やその近縁現象を扱った翻訳書は、ムーディの著書の他にも何点か出版されていました。代表的なものとしては、アメリカとインドの臨終時体験を比較した超心理学者カーリス・オシスらの『人間が死ぬ時』(たま出版、一九七九年刊。後に原著第2版が、日本教文社より『人は死ぬ時何を見るのか』という邦題で刊行された)、国際臨死研究学会初代会長

註1 『アメリカ医師会誌』(一九七九年、二四二巻、二六五―二六七ページ)には、ヴァージニア大学精神科のイアン・ステイヴァンソンらの『臨死体験——死後生存問題との関連』という論文すら掲載されています。なお、この雑誌は、『日本医師会誌』などの内輪の雑誌と違って、一流の医学雑誌です。

註2 本書の著者マイクル・セイボムは、心臓病専門医として、現在、アトランタ市内で開業しつつ、ふたつの病院で非常勤の医師を務めています。臨死体験の研究はその後も続けており、一九九八年には、第二作として『光と死 *Light & Death: One Doctor's Fascinating Account of Near-Death Experience*』を出版しました。この著書も、本書と同じ日本教文社から翻訳出版されることになっています。

の心理学者ケネス・リングの『いまわのきわに見る死の世界』（講談社、一九八一年刊）、世論調査で有名なジョージ・ギヤラップの『死後の世界』（三笠書房、一九八五年刊）があります。本書は、それらに続いて、一九八六年六月に刊行されました。まもなく、朝日新聞書評欄に、生物学者・長野敬氏による書評が載ったこともあって、一般読者ばかりでなく、一部の医療関係者や科学者にも注目されたようです。しかしながら、ここまでの段階では、この現象に対する関心は個人的レベルに留まり、それほど大きな展開は見られませんでした。

その後、一九九一年三月に、NHKテレビ（総合および教育）で臨死体験が連続ドキュメンタリー番組として取りあげられました。そして、その番組で案内役を務めた評論家の立花隆氏が、『文藝春秋』誌でこの現象に関する連載を始めたことで、臨死体験の存在は一挙に知られるようになりました。それから、新聞各紙が、『死後の世界』との関連で特集記事（たとえば、読売新聞 九〇年六月二日、産経新聞 九〇年七月一〇日夕刊、日本経済新聞 九〇年八月八日夕刊、朝日新聞 九一年九月二日夕刊、毎日新聞 九二年一月二日）を組み、映画や漫画でも取りあげられました。また、大学祭の医学部イベントとしてパネルディスカッション（東京大学医学部五月祭 九二年五月二三日）も企画され、臨死体験を扱ったさまざまな著書が続々と翻訳出版されるといって、一種の臨死体験ブームが到来しました。

その前後の専門家の動きとしては、まず一九九一年に、愛媛大学教育学部の社会心理学者・中村雅彦氏が、超心理学の視点から、『臨死体験の世界』（二見書房）という著書を出版しています。その翌年には、京都の朝日カルチャーセンターで、著名な哲学者や心理学者や精神科医が、それ

ぞれの立場から臨死体験について講演しました。その記録は、『人間終末の風景』（一九九三年、大阪書籍刊）という本にまとめられました。また、この年には、ベッカー氏も、やはり超心理学的な視点で書いた『死の体験——臨死現象の探究』（法蔵館）という著書を出しています。

わが国の臨死体験研究の現状

しかし、まことに残念ながら、そのあたりが限界でした。わが国では、臨死体験という現象に對して、通俗的かつ一時的な熱狂のみにはほぼ終始し、それも次第に鎮静化して、現在に至っているわけです。結局、科学的、組織的な研究はほとんど行なわれませんでした。

もちろん、ごく少数の例外はあります。ひとつは、東京の杏林大学病院で、昏睡状態に陥った、あるいは昏睡状態に陥って同病院に入院してきた三八名の患者を対象に行なわれた調査です。その結果、一四名（三七パーセント）に臨死体験があったことがわかったそうです。この調査は、小規模ですが、対象を無作為に選択した前向き研究であるだけに重要です。この研究は、後に、同大学医学部高齢医学科の山村尚子氏により、『日本老年医学会雑誌』（一九九八年、第三五巻二号）に発表されています（なお、この研究は、同氏の博士論文にもなっています。この種の研究で博士号を取得したのは、わが国では同氏が初めてでしょう）。

もうひとつは、『臨床精神医学』誌（一九九六年、第二五巻一一号）に掲載された、ホスピスで有名な浜松の聖隷三方原病院の森田達也氏による研究です。これは、終末期の譫妄状態せんもうの中で

見られる“幻覚”を、緩和医療の視点から肯定的にとらえようとする試みです。従来は異常な症状として却下されてきた“幻覚”を、臨死体験との関連で見直そうとする姿勢は、これまででありませんでした。その点で、この研究は貴重なものと言えるでしょう。

学会での口頭発表が学会誌に掲載された研究も、ベッカー氏や先の山村氏によるものをはじめとして、いくつかあります（日本の医学関係雑誌の抄録集である『医学中央雑誌』にリストアップされた臨死体験関係の論文や記事は、オンラインで検索できる一九八三年以降では、それらを含めて、全部で二三件あります）。ただし、残念ながら評論的なものが多く、調査研究的なものほとんどありません。興味深いのは、事実上すべてが“応用”を謳っていることでしょう。先の山村氏の論文は「終末医療における意義の検討」となっていますし、森田氏の論文は「緩和ケアの視点からみた一考察」、ベッカー氏の論文は「臨床的応用」となっているのです。これが、わが国の臨死体験研究の現状であり、わが国の科学の実態です。

もちろん、応用が悪いということではありません。それどころか、実際の医療に役立つものであることはきわめて重要です。しかし、その一方で、ものごとの本質を追究したいという願望が人間の心に潜んでいるのも、まぎれもない事実でしょう。応用とは無関係に、「ただ知りたいから調べたい」という願いが、科学の出発点になるわけです。

著名な神経学者であった故豊倉康夫氏は、自らの体験を、わが国の代表的な精神医学専門誌である『精神医学』（一九九一年、第三三巻六号および一〇号）に、二回にわたって発表しています。豊倉氏は、「若いときから『脳と心』の謎について苦悩に満ちた葛藤の中で考えあぐねて過ごし

てこられたそうです（私信、二〇〇二年三月一日付）。この体験報告は、科学的探究という脈絡で書かれているため、応用を目的にした、わが国の他の報告とは少々異なっています。

欧米の研究にも、さまざまな意味で治療に役立たせるためのものが多いのは事実ですが、この体験の原因を科学的な立場から検討している研究も、決して少なくありません。ただし、本書の第一〇章を見るとわかるように、脳内の現象として説明しようとする研究が圧倒的多数を占めます。そして、その論争は、医学雑誌の誌上で行なわれているのです。その点も、わが国の現状とは大きく異なるところでしよう。しかしながら、心が脳から離れて存在するかどうかを明らかにする目的で臨死体験の研究を進めている研究者は、欧米でも、かつてのアメリカ心霊研究協会（ASPR）および心霊研究財団（PRF）の研究グループや、現在でも活動を続けているヴァージニア大学精神科（人格研究室）のグループを除けば、ほとんどないのが実情です。その点で、本書は、きわめて例外的な著書と言えるでしょう。

日本とわが国と科学者の姿勢

わが国は、一三〇〇年以上の昔から、今なお実用に耐える巨大な木造建築を造り、一二五〇年前には世界最大の大仏像を鑄造し、江戸時代以前から、遠くヨーロッパにまで廉価で良質の銅を輸出していたほどの、世界に冠たる技術大国です。周知のように、その伝統は今なお続いています。しかしながら、日本は科学の国ではありませんでした。

とはいえ、明治以前にも、科学者と呼ぶべき人物がひとりもいなかったわけではありません。科学者とは、科学的方法——つまり、主として実験と観察——を使って、宇宙の森羅万象に関する真理を追究しようとする人たちのことです。しかし、そのような人たちがいても、研究は個人の関心の枠内で終始してしまい、組織的な形ではほとんど行なわれなかったのです。要するに、科学の伝統がなかったということなのですが、伝統がなかったこと自体が問題なわけではありません。必要なら、これから伝統を作って行けばよいだけのことでしよう。問題は、それを実現しようとする意志が、明治以降のわが国の科学者にあつたかどうか、また、現在の科学者にあるかどうかです。

明治になって、欧米の哲学や科学や技術が、わが国に本格的に導入されました。科学分野としては、物理学や化学など、応用性の高いものや技術的色彩の濃いものは、わが国にも迅速かつ完全に定着しました。それは、明治初年の東京大学に動物学講座を作った、大森貝塚の発見者としても名高いウイリアム・モースが、驚嘆しながら述べている通りです。

西洋医学も、そもそも実用的、技術的側面が大きいため、それなりに定着、発展しましたが、同じ医学でも、精神医学のように、暗黙のうちに技術がほとんど役立たないと考えられている分野では、少々事情が違っていました。それは、英語圏の医学雑誌に掲載された、わが国の精神科医による論文が、他科の論文と比べて圧倒的に少ないという事実からわかります（未だに英米が世界の医学研究の覇権を握っているのは、きわめて理不尽なこととはいえ、動かし難い事実なので、これがとりあえずの指標になるわけです）。

結局、わが国で開発された精神医学方面の技術としては、分裂病治療のために考案された生活臨床や、神経症の自己治療体験から編み出された森田療法や、宗教的な修行法から生まれた内観療法などが、その数少ない例外になるわけです（ただし、内観療法を形作ったのは、専門家ではなく一般人です）。その中で、実践は別として海外の専門家にも広く知られているのは、おそらく森田療法だけでしょう。このように、世界で通用するような普遍性の高い研究は、特に理論面の研究は、わが国ではほとんど行なわれませんでした。^{註3}

ところで、このような点に関連してわが国は、“猿まねの国”などという、ありがたくない評価を海外から受けてきましたが、それは、二重の意味で正しくありません。ひとつは、海外から得た知識や技術を、単に模倣するのではなく、多くの場合、日本風加工し、場合によっては大幅に違うものにしてしまうからです。これは、単なるまねを越えた、高度な創造活動です。もう

註3 わが国の精神医学で唯一とも言える例外は、小坂英世による治療技法および治療理論である。しかし、この技法は、海外どころか、わが国でもほぼ完全に無視されてきた。この問題については、拙著『幸福否定の構造』（笠原、二〇〇四年）を参照のこと。ついでながら、わが国では、土居健郎氏の“甘え”概念が有名であるが、この概念は、海外ではほとんど知られていない。一九六六年以降に発表された世界中の医学・心理学関係の論文がオンラインで検索できるPUBMEDで調べると、甘えという言葉が含まれている論文は一九件あることがわかる。しかし、そのほとんどが、土居氏をはじめとする日本の研究者によるものである。“甘え”概念が海外で認知されていないのは、これが日本人の心性を説明するための概念であり、普遍性に乏しいためなのであろう。

ひとつは、それとは逆に、一部の科学分野が、わが国独自のフィルターのために、長い時間をかけても、外部から入って来にくいことです。このように、わが国は、西洋のものをすべて取り入れるわけではありません。医学方面で典型的な実例としては、偽薬（プラシーボ）効果として知られる現象の研究があげられます。

偽薬効果と呼ばれる現象は、わが国でも、薬剤師や検査技師などを除く医療従事者の間では、ごくふつうに知られていますし、新薬の研究に際してばかりか、臨床の場面でも、日常的に利用されています。そして、その驚嘆すべき効果が絶えず確認されているのです。とはいえ、そこまでは、偽薬の技術的、応用的な側面です。

それに対して、薬効を持たないはずの偽薬になぜ効果があるのか、という根本問題があります。ここで、暗示という概念が浮かびやすいでしょうが、これは、単なる暗示効果ではありません。もちろん、暗示という現象も、人間の持つ隠された能力を探究するうえできわめて重要です（笠原一九九五年）が、偽薬効果は、いわゆる被暗示性とは無関係であることがわかつているのです。

しかしながら、ことは、それだけに留まりません。本来の薬効とは逆の効果が観察されることもあるのです。たとえば、吐き気のある人に、「これを飲めば吐き気が止まります」と言つて、催吐剤（吐き気を催させる薬）を服用させると、吐き気が強くなるはずの薬を飲まされたにもかかわらず、吐き気が治まる人が多いという結果すら得られています（Wolf, 1950）。つまり、薬の化学成分よりも言葉のほうに反応する人が多いことになるわけです。ここには、人間の心が持つ、計り知れない力がかかっていることがわかるでしょう。

その“心の力”は、暗示効果と総称される現象はもちろんですが、多重人格障害の人格変化に伴って一瞬のうちに起こる身体的変化などにも、大きく関与しているはずです(笠原、一九九九年)。ちなみに、多重人格障害は、北米ばかりでなく、近年、わが国でも多発していますから、今ではかなり身近な疾患になっています。

偽薬効果という現象については、欧米では二千を越える大量の文献が存在します。にもかかわらず、わが国では、偽薬効果自体の研究は、事実上全く行なわれていないのです。この極端な差は、どのように説明すればよいのでしょうか。この方面の研究がわが国の科学者にほぼ完全に避けられていることは、三年前に専門家向けに出版した拙編書(笠原、二〇〇二年)が、医学や心理学の関係者にほとんど無視されていることからわかります。

この厳然たる事実を見ると、わが国では、純粹に科学的な研究はほとんど関心を持たれないのではないかと、思うのがさらに強まります。そればかりではなく、超常現象の研究がそうであるように、心の力が関与している現象の科学的研究は、わが国では欧米よりもはるかに避けられやすいということなのかもしれません。その理由はともかくとして、もしそうであれば、この問題は、わが国で臨死体験の科学的研究が行なわれない理由とも共通してきます。将来的には、このきわめて重要な側面の研究をする分野として、科学社会学に倣って、“科学心理学 psychology of sciences”という新分野が作りあげられることになるかもしれません。

以上の理由から、私は、一九九一年に次のような予測をしました。

「わが国では」死後の世界の存在を検証する死後生存研究としての臨死研究は、今後もほとんど関心を持たれないだろうが、「死の臨床」などへの応用としての臨死研究は、いずれ日本でも行われるようになるのではなからうか。私としては、この「前半の」予測が外れることを祈るが、いずれにせよ、時が経つのを待つしかないのであろう（笠原、一九九一年、八ページ）。

一四年後の現在、わが国の状況を振り返ってみると、最初からわかりきっていたこととはいえ、前半の予測が当たったのはまちがいありません。しかし、これまで述べてきたことからわかるように、後半の予測のほうは、ほとんど当たらなかつたと言えるでしょう。これは、きわめて残念なことです。応用を前提としない研究は別にしても、臨死体験の応用的研究が、いずれ、本当の意味でわが国に根づくことはあるのでしょうか。その功罪はともかくとして、結局のところ、その選択は科学者に委ねる以外ありません。わが国は、今後とも技術の国に終始するのでしょうか。

二〇〇五年

笠原敏雄

参考文献

K・オシス、E・ハラルドソン（一九九一年）『人は死ぬ時何を見るのか』日本教文社

- 笠原敏雄（一九九一年）「臨死研究と日本」『春秋』八・九月号（通卷第三三一号）
- 笠原敏雄（一九九五年）『隠された心の力——唯物論という幻想』春秋社
- 笠原敏雄編（一九九九年）『多重人格障害——その精神生理学的研究』春秋社
- 笠原敏雄編（二〇〇二年）『偽薬効果』春秋社
- 笠原敏雄（二〇〇四年）『幸福否定の構造』春秋社
- 豊倉康夫（一九九一年 a）「臨死体験の記録」『精神医学』第三三卷六号、一〇号
- 豊倉康夫（一九九一年 b）「臨死体験の記録——死直前の Euphoria は『物質』によるものか」『精神医学』第三三卷一〇号
- 豊倉康夫（二〇〇二年）「私信」三月一日付
- C・ベッカー（二〇〇二年）「臨死体験の臨床的応用」『死の臨床』第二五卷一号
- 森田達也（一九九六年）「終末期せん妄にみられる幻覚の意味——緩和ケアの視点からみた一考察」『臨床精神医学』第二五卷一—号
- 山村尚子（一九九八年）「臨死体験——終末医療における意義の検討」『日本老年医学会雑誌』第三五卷一—号
- Sabom, M. B., and Kreuziger, S. (1977). Near-death experiences. *Journal of the Florida Medical Association*, 64, 648-50.
- Sabom, M. (1998). *Light & Death: One Doctor's Fascinating Account of Near-Death Experience*. Grand Rapids, MI: Zondervan Publishing House.
- Stevenson, I., and Greyson, B. (1979). Near-death experiences: Relevance to the question of survival after death. *JAMA*, 242, 265-67.
- Wolf, S. (1950). Effects of suggestion and conditioning on the action of chemical agents in human subjects: The

『「あの世」からの帰還』

pharmacology of placebos. *Journal of Clinical Investigation*, 29, 100-9.

訳者後記

〔訳者略歴〕

笠原 敏雄（かさらは としお）

1947 年生まれ。70 年、早稲田大学第一文学部心理学科卒業。東京都八王子市の永野八王子病院、北海道小樽市の医療法人北仁会石橋病院、東京都大田区の医療法人社団松井病院に勤務の後、96 年 4 月、東京都品川区に〈心の研究室〉開設、現在に至る。著書に『懲りない・困らない症候群——日常生活の精神病理学』、『幸福否定の構造』（以上、春秋社）、『超心理学読本』（講談社プラスα文庫）、『希求の詩人・中原中也』（麗澤大学出版会）その他が、編著書に『多重人格障害——その精神生理学的研究』、『偽薬効果』（以上、春秋社）その他が、訳書に『前世を記憶する子どもたち』（日本教文社）、『生まれ変わりの研究』（日本教文社）その他がある。

連絡先 141-0031 品川区西五反田 2-10-8-514 心の研究室
電子メール kasahara@02.246.ne.jp
ホームページ <http://www.02.246.ne.jp/~kasahara/>